



松江城と小豆磨橋の伝説

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

松 江大橋を北側に渡って、北西に進むと、ほどなく松江城に着く。山陰唯一の現存天守であり、しかも平成二十四年に発見された二枚の祈禱札から、「慶長拾六年正月吉祥日」などの文字が確認されたため、それ以前の築城が明らかとなり、平成二十五年に国宝となった。ところで城は伝説の宝庫だが、松江城の場合もそれに漏れず、まずは定番の人柱伝説がある。

慶長五（一六〇〇）年、堀尾吉晴がこの地に封ぜられると、宍道湖の北に位置する亀田山に松江城の建設が始まった。しかし天守台の石垣が何度も崩れてしまう。そこで人柱を立てることになるのだが、松江を愛した小泉八雲は『神々の国の首都』で次のように記している。

「松江の一人の娘が築城のとき城の石垣の下に今は忘れ去られた神々への犠牲として生き埋めにされたという話がそれである。娘の名前は全く記録に残っていない。彼女のことでは分かっていないのは、ただ彼女が美しかったことと踊りが非常に好きだったこととの二つだけである」。城の完成後、若い娘が城下で踊ると必ず城の土台が揺らいたという。

もう一つ、これは城の東四〇〇ほどのお堀ばたにある普門院の近くに架かっていた小豆磨橋の話だ

が、やはり「神々の国の首都」におおよそ次のようにある。

「小豆磨橋の由来は、毎夜、橋の下で影のような女が小豆を洗ったという昔話によっている。この橋の付近では謡の「杜若」を絶対に歌ってはならなかった。ある夜、怖いものしらずの侍が、その橋に向かいて声高に「杜若」を歌ったが、何も起こる様子はないので自宅に戻ると、門の所で背の高い美女が待っていた。女はお辞儀をすると漆塗りの箱を差し出し、『これは奥方様からのお届け物でございます』と言ひ、姿を消した。箱を開けると、血だらけの幼児の首が入っており、家には首をもぎ取られた幼い息子の死体がころがっていた」。

さて、女からんだ陰惨な話を二つ紹介したが、口直しに再び松江城にもどり、寛永十五（一六三八）年に信州松本から移封された松平直政の愉快な話を一つ。直政は大坂冬の陣において真田丸攻めに奮戦した勇将と伝えられる。さらには口達者でもあったという。直政以後、明治維新まで松平氏がこの城の城主となったが、入城時にひと悶着あった。直政がはじめて天守閣にのぼると、臍長けた妖女が忽然と現れ、「この城は、わらわの物だ」と美しくも凄まじい。しかし、直政は少しも臆せず「コノシロが欲し

くば、取り寄せてやるわい」と言い放った。

コノシロとは、小さい時にはシンコ、コハダと呼ばれる江戸前寿司には欠かせない美味い魚だ。これを聞いた女は、たちまち姿を消して二度と現れず、直政は義理堅くも毎年コノシロを取り寄せたという。妖女の正体は人柱の美女か、小豆磨橋の奥方か。いずれにしろ魔性には違いないが、シヤレが分かるし、相当の食いしん坊でもあったようだ。



松江城と石垣

[交通] JR松江駅から徒歩約20分以上